

中世紀に於けるギルド制度

崩壊の外部的原因

松 崎 實 次

第一序 説

第二 ギルド制度崩壊の外部的原因

- 一 商工業の發達と市場の擴張
- 二 文藝復興及び宗教改革に依る人心の變化
- 三 中央集權の擴大強化

第一序 説

歐洲經濟史を繙かれる人々は中世紀に於て所謂經濟ギルド或は産業ギルドと稱せられる一經濟制度、換言すれば商業ギルドや工業ギルドが如何に同時代の商工業の發展に寄與する所の多かつたかを知らるゝであらう。又同時に他面に於ては、之等のギルドのメンバーが國王より或は都市當局より種々の特權を附與或は買収等の方法によつて獲得し、之を利用することに依つて、ギルドそれ自體が發展すると共に、メンバー各自の事業が發展擴張

中世紀に於けるギルド制度崩壊の外部的原因

せられると共に、産を積むに至つて、中世紀の中堅社會層を形成して重きをなし、更に勢力を得るにつれて、國王や都市當局の監督から離脱して組合自治制度に迄進み、ギルド組織當初の目的の外に政治的目的をも有する様になり、ギルドの代表者を市會に送り、遂には市の高級吏員即ち市長や助役の位置までも奪つて市政を左右するものが少くなかつた事實も認められるであらう。かくの如くギルドが勢力を得るに従ひ、特權を濫用して組合員の經濟的利益の増進を圖り、極度に組合員以外の商工業を壓迫して彼等の經濟的活動を不便ならしめ、組合員との競争を不利に導いて彼等を窮地に陥れ、或は排他主義を採つて組合員たらんと希望する者を排斥して、獨占的利益を少數の組合員で壟斷するに至つたのである。組合員たるの資格を嚴重にしたり、加入金を増加したり、親方試験に際して其の受験者たる職人に高價なる材料を用ひしめて、貧困なる職人をして受験を困難ならしめたるが如き、又試験合格者に對しては巨額の費用を要する披露宴を強制したるが如き、親方の雇ひ得る徒弟數を制限したるが如き、何れも排他主義の具體化された事實に過ぎないのである。之等は單に一、二の例を示したに過ぎぬのであつて、他にもかゝる事例は決して少くはないと思ふ。

右の如くギルドが經濟上に於て將又政治上に於て專横を恣にして他を顧ることなきに至つて、弊害は百出し、組合員以外の者からは怨嗟の的となつたのは當然と言はねばならぬ。何時の時代でも、如何なる人、如何なる團體であつても、我儘勝手な行動、道理に従はざる行動は許さるべきではない。常に正道を歩み、時代に即して正しき主張をなし、俯仰天地に恥ぢざる行動をなすものこそ堅實なる發展となし、眞に榮えるべきである。經濟制

度の如きも亦同様であつて、ギルド制度は十五、六世紀に入つてから此點に於て缺くる所が甚しかつたのである。其の爲めに一時昇天の勢で前進し發展した此の制度も遂に衰へ、殘骸を近世に残すに過ぎぬ状態となつてしまつたのである。

筆者は既にギルド制度が如何にして發生、發展したか又如何なる組織であつたか、或は又ギルド制度の産業界に及ぼしたる影響、都市との關等係についても若干の研究を公にしたので、茲にはギルド發展過程の末期に於ける衰微の外部的原因につき一瞥を與へんとするのであるが、しかし此の點に關してはかつて發表した「工業ギルド」なる一論に於ても述ぶる所があつたから、茲には成るべく重複を避ける様に努めたが、而も尙ほ前後の關係から重複の止むなきに至つた箇所もあり、又前論と併せて一讀を願ふならば本論の補足ともなる譯であるから、此の點讀者諸賢に御諒知を乞ふ次第である。

第二 ギルド制度崩壞の外部的原因

凡そ生物は何れも或る環境の中に發生し、發展し、やがて衰頹し遂に死に至るものであつて環境から全く離れて存在することは出来るものではない。従つて環境は生物の發生、發達、衰頹等に直接間接に影響を與ふるものであることは疑ふ餘地はないことである。而して環境は嚴密なる意味から言へば絶えず變化してゐるのであるから、自然それが生物の發生、發達、衰頹等、要言すれば生物の生命に善惡何れかの影響を及ぼすのは當然である。

一般的に見れば生物が環境の變化に適應してゆくことが出来れば、健康を保ち天壽を完うすることを得るであらうし、之に反すれば安外早く衰頹して生命を失ふに至るであらう。尤も生物就中間はそれ自體の本能、工夫、努力等に依りて環境を動かして自己の生存に都合のよい様に變化せしめることも不可能ではないが、環境の力の偉大なるに比すれば生物の此の力は微々たるものである。ギルド制度も此の點に於て生物と環境との關係に相似たる所がある。即ちギルドも絶えず變化しつゝある環境の變化から當然影響を受けなければならなかつたのである。而して次に述べるが如き外界の事情の變化がギルド制度の發展を抑制したるに止らず、その爲にギルドは禍されて、即ち環境の變化に適應する處置を探ることが出来なかつた爲めに、段々と勢力を失ひ、特權を奪はれ、時代に即せざる一制度として衰微し、生命を失ふに至つたのである。

一 商工業の發展と市場の擴張

歐洲にありては十三世紀が中世史の最高調に達した時代であつた。十四世紀に入ると早くも中世的傾向が幾分衰へ始めて近代的傾向に向つて來たけれども、しかし未だ近代的統一國家は生れず、諸侯、貴族、都市、教會等が對立して割據し、國王と雖も王權を充分に伸長して、國內に普く威を振ふことが出来なかつたのである。然るに十五世紀に入りてよりは此の形勢は漸次變化するに至り、國權が段々強くなるにつれて、諸侯、貴族、都市、教會等の勢力が壓迫せられ、或は彼等の權限は制限せられ、或は領地を沒收せられ、或は合併を強制せられる様

になつたのである。かくの如くして中世紀時代に多數に分立してゐた地方が段々と大なる集團となつた。都市の合併の如きも其の一例である。而して王權が強くなるにつれて地方分權の力は弱くなり、遂に近代的統一國家を出現するに至つたのであるが、かくなれば政治は勿論國民の經濟狀態も自ら一變せざるを得なくなつたのである。即ち以前には政治は一地方或は一都市に各々孤立的に行はれ、住民も孤立して經濟生活を營んでゐたのであるが、今や隣人を敵視したり、外人視しゐることは出来なくなつて同一君主の許に統一せられ、相携へて生活の向上を計らねばならぬことになつたのである。従つて狹隘なる地域に閉込められて居り且つ排他的傾向の強い都市經濟の如きも、最早や時代に即せざるものとなつてしまつたのである。之に代つたものは言ふまでもなく國民經濟である。國民經濟は決して地方的、排他的、特種的性質のものではない。全國的、調和的、一般的性質を有するのである。従つて經濟的發展も此の方向に向つて進まねばならぬ。それ故に國王は強化された權力を貨幣、度量衡、税制、交通、生産、消費等あらゆる經濟部面に於て國民的統一的に用ひねばならぬのである。其の結果從來地方的諸制度、組織の上に一大革新が起り、一國を單位とする制度、組織が生れることになつたのである。國民も地方的偏見を捨て、他地方の利益とも調和し、進んでは國民全體の利益を調和せんとの精神を有する様に變つて來た。勿論改革にも自ら一定の順序を踏まねばならぬ。急速なる革命は別として然らざる限り漸を追ふべきを捨て、採るべきを採つて改革の實を擧げることが改革に必要なことである。だから統一國家が出来上つたたらとて何も彼も一氣呵勢に前時代の文化、制度等を突如として一變してしまふことは出来るものではない。特

に經濟制度の如きは之が完成される迄には可成長い年月を經過してゐるのであるから、之が改まるにしても其の傳統や習慣が自然に新制度の中に残るを常とするのであつて、之等が全然排除せられてしまふことは六ヶしいことであつて、之等が跡形もなく消滅してしまふ迄には長年月を必要とするであらう。

右の如くであるから、都市經濟から國民經濟に移つてからも、都市經濟の片鱗は各所に散見せられるのである。例へばホルベヤ Jean Baptiste Colbert (1619—1683) が織物商人より身を起して遂に一六六一年に大藏大臣となり、更に一六六五年に宰相となつたのであるが、彼は在任中に重商主義の實現に努め、以て國富の増進を圖り、國力を充實し、國威の發揚をなさんとし保護干渉政策を極端と言はれるまでに實行したるを以て知られてゐるのであるが、彼がかゝる政策を行ふに際して、昔ヴェニス Venice やフロレンス Florence で行はれた政策實現の方法を多分に取り入れたるが如き其の一例である。それは兎も角として地方經濟、弧立經濟、都市經濟が破れて全國的經濟、調和經濟即ち國民經濟は成立し其の後年と共に充實し發展したのは事實である。其の爲めに交通運輸機關、商業補助機關も發達し、人口も増加して來たから商品は最早や狹隘なる地方市場を目的とせず、全國的市場を目標に製造せられ、商人の活躍範圍も著るしく擴大せられた。かゝる事實は狭い境界内に閉ぢ込められて居り、しかも廣い地域を市場とすることの出来ないギルド制度には大打撃であつたに違ひない。特にコロンブス Christopher Columbus (1492—1506) の一四九二年より一五〇四年に至る間に四回に亘る探險に依つてアメリカ大陸が發見せられ、又ヴァスコ・ダガマ Vasco da Gama (1469—1525) が喜望峯を周航してアフリ

リカ大陸の東岸を北航し、印度洋を横断して一四九八年印度マラバル Malabar 海岸のカリカット Calicut に到着して茲に印度航路が発見せられ、又マジェラン Ferdinand Magellan (1480—1521) に依り世界周航の大事業が完成せられ、其他色々の探險家によりて従来未知の土地の発見や開拓が行はれたので、之等の地方と歐洲諸國との通商が開かれるに至り漸次其の有望なる事がわかつて來たから、之迄商業上重要視せられてゐた歐洲や地中海の小天地は著るしく其の重要性を失つてしまつたのである。勿論從來と雖も歐洲と東洋、アフリカ等との通商がなかつた譯ではないが、それは微々たるものであつた。然るに新大陸や印度航路の発見や航海術の進歩等によつてアメリカ、印度などとの交通が頻繁となり、商人は競つて、之等の地方と通商し、年と共に盛になつて來たのである。即ち地方市場から全國市場に進出した商品は今や更に躍進して世界市場に向ふことになつたのであつて、之が爲めに愈々ギルドの活動は妨げらるゝに至つたのである。それ故に商業の中心地は地中海を去つてしまひ、一時賑盛を極めたジェノア Genoa、フロレンス Florence、ヴェニス Venice、ピサ Pisa、其の他の商業都市は漸次衰へ、遂に陰氣に鎖されたる死の都市に化してしまつたのである。ギルドは右の如き諸事情の變化から深刻なる脅威を受けたのは當然であるが、此の變化に應ずる適當なる處置を発見せんともがいたけれども、それは遂に不可能であつた。

世界市場の發展によりて、商品の需要は著るしく増加した。世界に散在する人々の需要を満たす爲めには從來の如き小規模生産では間に合はない。生産方法も改めねばならぬ。又大資本も必要である。金融機關も協力せね

ばならなくなる。かくして資本主義は刺戟を受け非常に發達して來た。而して大商工業は勃然として起り、商人は新天地の富源の開發に努め、工業家はその地方に送る商品の製造に懸命の努力をほらつた。而して同時に、取引所、銀行も發展し、交通運輸機關、通信、廣告機關、印刷術なども興つて來た。かくして大商工業家は富を積み、勢力を得るに至つたがそれにつれて彼等はギルドの特權や獨占を侵し、排他主義に反對し、徒弟制度などを無視して工場に農民や婦人や小供の労働者を雇傭して働かせた。ノルウィッチ Norwich に於ける工場では六歳の子供を労働者として使つてゐた程である。古い農村都市が今や商工都市に變り、織物工場、食糧製造工場等が各所に興り労働者も著しく増加した。英國などでは貧乏な農民が多かつたので工業家の需めに應じ喜んで工場に集つたといふことである。従來排斥されてゐた外國労働者も這入つて來た。ギルドは新興工業に對して死物狂となつて反對し、爲めにギルドと新工業家との間に紛争が頻々として起り、多數の訴訟事件となつて現はれてゐる。然しながらそのために新工業の發展は妨げらるゝことなく、ギルドの反對主張は破れ、その運動は効を奏しなかつた。

更に大工業の發展を助けたのは分業と機械の發達であることを一言したい。多くの製造品はそれが完成せられるまでには幾多の生産過程を経ねばならぬ。羊毛工業について見るに、先づ洗はれ、次に打たれ、梳られ、油付けられ、紡がれ、織られ、布目を密にせられ、引延され、染められ、仕上げられ、返りたゝまれるなどの過程を必要とするのであるが、之等の仕事は手工業時代には同一労働者或は小數の労働者に依りてなされてゐたのであ

る。然るに今や機械しかも發達せる機械の使用によりて部分的の仕事を専門の勞働者が分業的になすのである。恐らく今日では右の生産過程は一層細分されてゐるであらう。機械の使用と分業の發達によりて大量生産が出來、生産費の減少従つて價格の低下となり、且つ生産時間の節約が出来る様になつたことは申すまでもないことである。英國では機械のない時分にはバイブルの價格が六百クラウンもしたのに、印刷機が發明されて間もなく、其の十分の一で求められる様になつたといふ事である。今日では機械も發達し大量生産をされる様になつたから更に著しく安價となつたことは讀者諸賢の知られる通りである。之は單に一例にすぎぬけれども織物でも、道具でも手工業時代とは比較にならぬ安價に、しかも容易に豊富に得られる様になつたのである。かくして古い工業は衰へ従つて古い工業と密接な關係にあつたギルド制度も衰微せざるを得ざることとなつた。ギルドは絶えず新興勢力に對して反對したに不拘、時勢に適合した新工業は順調に發展したのである。尤も大工業の發達はよい品物を安價にしかも大量に供給することによつて人類の經濟的慾望をよりよく充足し、物質文明の向上に寄與する所が大であり、人間に幸福をもたらしたといふ長所があるけれども、又其の反面には多數の勞働者は苛酷なる規則に束縛されて長時間安い賃銀で働かねばならぬ境遇に陥入れられ、古への筋肉的熟練勞働から得らるゝ勞働上の興味をそがれ、將來に對する獨立的企業家たるの希望を失ひ、終生勞働者として運命づけられてしまひ無産階級に釘付けにされたるが如き缺點もあつた。又資本家たる雇主との間に利害の衝突が起り遂に資本家階級と勞働階級とが別々に團體を組織して對立し、色々な社會問題や勞働問題を惹起するに至つたことは決して喜ぶべきこと

とではない。殊に工業の發達に伴つて弊害も多くなり、勞働者の自覺が高まり、階級意識が明確となり、勞働組合の組織が擴大強化せられるに従つて、之等の問題も複雑多岐に亘り、随分深刻なる闘争が起る様になつて來たのである。ギルドは最早や等の紛争を鎮める實力を失つてしまつてゐる。そこで一時は勞働者の結社權が否定せられたり、大會を開催することも武器を使用することも禁ぜられたりしたこともあつたのである。

要するにギルドは商工業が狹隘なる地域に閉込められ地方市場を目標として小量の物資を製造し之を配給するに適する制度である。文化もあまり向上せず、産業も幼稚であり大資本も不要な時代には此の制度存在の意味も充分あつたけれども、既に各種産業が發展して市場が全國的となり、更に進んで世界的となるに及べば物資の製造も配給も運搬もギルドの如き小資本、小經營を以てしては満足に出來るものではない。そこで自ら新時代に即した企業が興り、此の時代に適合した生産組織が發展し勢力を得るに至るは自然の理と言はねばならぬのである。此の大勢はギルドが如何に反抗しても、到底動かし得るものではないのであつて、時代に適せざる制度は其の改革が行はれざる限り存在の重要性を失ひ従つて衰微に向ふのは止むを得ぬ所である。

二 文藝復興及び宗教改革に依る人心の變化

1、文 藝 復 興

商工業の發達と市場の擴張とが如何にギルド制度に影響したかに就いては、既に概要を説明した所であるが、

此の外部的事情の變化は單に廣さに於て起つたのみでなく、性質の上にも起つたのであつて、之がギルド制度崩壞の一因となつたことは否定し難い事實である。歐洲では十五世紀から十七世紀にかけて文藝復興、宗教改革、國家權力の強化等の重要な事件が起つた。而して之等は何れも歐洲の文化史上の問題として興味をそゝる計りでなく、經濟史上の問題としても亦重要な事件であり、興味ある問題であると信ずるのである。しかし茲には只之等の出來事がギルド制度に如何なる影響を與へたかについて一考察をなすに留める。

文藝復興 Renaissance は再生、復活、新生等の意であつて古代文化を復興するといふことである。しかしながら單に古代文化を其のまゝ復活させるといふことではなくして、新時代に適合した文化を創造せんとするの理念から出た文化運動である。換言すれば中世紀に於ける理想、文化、生活等を離脱して、新時代に適したる、或は新時代を創成發展せしむべき理想、文化、生活等を築き上げんとする新興運動である。たゞかゝる運動が古代文化復興の形式を通して行はれたといふ所に文藝復興の特徴があり、又文藝復興と呼べるゝ所以でもある。故に文藝復興を單に古代の語學や文學や美術等を復活せしめたものであると解するのは部分的考察の結果であつて決して當を得たものとは言へない。文藝復興を一般的に要言すれば古代文化復活運動を通して行はれた智的革命であり、人間生活に於ける全般的革新であると言ふべきである。

ギリシヤ、ローマの古代文化はローマ帝國の衰落と共に衰へたが、しかしそれは全然なくなつてしまつた譯ではない。主として伊太利人の潜在意識となつて残り、中世を通じて其の片鱗を見ることが出来るのである。而し

て中世末期に教會文化が發展した時代には古代文化に對する憧憬が強くなり、遂に之を實現せんとする運動となつたのであつて、此の新文化運動は内容的にも地域的にも漸次發展して單なる文藝の復活から人間生活の打開運動となり、又運動の中心地はフローレンスであつたが、段々ローマ其他の都市に及び、更に伊太利全土に廣がり北中歐諸國にも傳播し、遂に其の効を收むるに至つたのである。それ故に文藝復興運動は政治上にも宗教上にも關係する所が深く、茲に述べんとする經濟上にも密接なる關係を有するのであつて、此運動が新興の商工業階級、資本家階級とも握手して行はれたといふ事實を見のがしてはならぬのである。文藝復興に意を用ひた文學者や學者の中には、光輝ある過去の文化に對して熱愛するあまりに、只單に古典の研究にのみ没頭して死せる國語の爲めに、現在の國語を捨てゝしまふといふ様な弊に陥つた者も決して尠くはなかつた。會話や手紙に現代語や現代文を用ひずして、古いギリシヤ語やラテン語などを用ひたるが如き、其他生活様式を古代のそれを其のまゝ取入れたるが如きは一例に過ぎぬのであるが、かゝる者は一種の文藝道樂家に墮してしまつたと言ふべきであらう。此の種の人々は古典研究の爲めに長年月を費し非常な努力をなしたのであつて、古典に關する智識を豊富に持つて居るものを上流階級の者であると考へて尊敬崇拜したのである。従つてかゝる教育を受けることの出來ぬ勞働者の如きは、下層階級であり輕蔑すべきであるとした。斯様な考へ方が勞働社會に惡影響を及ぼしたのは當然であつて、之が爲めに種々の階級別をつくつた。商人階級と勞働階級との區別も此の思想によりて促進された。又手工業者の行ふ美術的部分が専門的美術家の仕事となり、茲にも美術家と手工業者との分岐が現はれ、美術家は

庶民階級から去つて富者たる上流階級の仲間入りをする事になつたが、手工業者の大部分は中産階級或は下層階級に留まり勞働階級と何等選ぶ所がなくなつた。此の様な分岐に弊害不利の伴つたことは歴史家も説く所であるが、ギルド制度に關連して之を見るなれば、ギルドから多數の組合員を失ふこととなり、爲めに其の勢力を失ふ結果を見るに至つたのである。

而しながら文藝復興を熱望した者が何れも文藝道樂家になつてしまつた譯では勿論ない。一般的に見れば眞の文藝復興即ち生活打開運動に向つて突進したのであつて、そのために科學に對する研究心を刺戟し、創意の精神を喚起し、發明改良への努力を促したのである。その結果當時の人々の智識が著るしく開發せられ、科學は進歩し、世界觀、人生觀の立直しが出來、茲に中世紀の文化より近世への文化を産出し得たのである。特に茲に述べねばならぬことは、進歩せる科學が工業と結合して工業を著るしく進歩せしめたといふことである。勿論工業の發展は既に述べた様な市場擴張に伴ひ商業が發展し、その影響を受けたには相違ないが、工業發展の技術的方面に科學の與へた貢獻は決して僅少なものである。又同時に文藝復興によつて人心に起つた變化、即ち人々の近代的理想、近代文化の建設、近代生活の創始等の事實は古い傳統を打破せねばならなかつた。生産組織、生産方法を改善せねばならなかつた。而して中世紀的束縛から離脱して近代的自由平等の立場に於て活動せねばならぬといふ思想に變つて來たのであるから、特殊階級の特權を死守する爲めに排他主義から出發してゐる所のギルドの諸取締規則は一般の人々に到底受入れらるべきものではなくなつてしまつた。結局ギルド規則は新時代に逆行

する悪規則となつてしまつたので、國により、ギルドにより程度の差、時代の差はあつたけれども漸次廢止せられギルドの勢力は次第に衰へるに至つたのであつて、従つてギルド制度の許に成立してゐた所の労働組織にも變化が起り、近代的のものになつたのである。

2、宗 教 改 革

伊太利に於て文藝復興の運動が盛に行はれてゐる時分に北部獨逸に於ては宗教改革 Reformation 運動が起つて來た。此の運動も初めは宗教それ自體に對する改革運動であつたのであるが、段々進展するにつれて政治、經濟、社會、思想等あらゆる方面に於ける改革運動となつたのである。結局宗教改革から出發した所の人間の社會生活全般に亘つた革新運動であり、中世的束縛からの解放運動であり、自由平等權獲得運動であると言ふことが出来るであらう。此の點に於て前述の文藝復興運動と一脈相通する所があり、又ギルド制度への影響も可成強く及んだ譯である。今茲には此の運動發展經過の概要を述べてギルド制度に如何なる影響を興へたかに言及したいと思ふのである。

中世紀に於けるキリスト教(舊教)はローマ教會が中心となつて居たので、宗教上に關するすべての實權は教會従つてローマ法王の掌中に收められてゐた。教會の活動は一面には民衆に幸福を興へたけれども又他面には民衆を束縛し、信者から淨財を集めて我儘勝手な行動をなしてゐたのである。而して信者が多くなるにつれて教會も牧師もあまりに世俗化し墮落してしまつた。勿論教義そのものには深遠な理論もあつたには相違ないが、之を説

く者は徒らに形式にとらはれて必ずしも其の教理を正しく傳へなかつた。それ故に眞のキリスト教義を知り信仰を深めんと欲する者、特に北方獨逸人の如き理論を好む信者には不満を感ずる者が段々多くなつて來たのである。そこで右の如き情況を改めてバイブルを中心とする信仰生活に立歸らんと希望が起り、遂に之が具體化したと考ふるは誤りである。既に十三、四世紀頃からキリスト教反抗運動が起つて來たけれども、當時は教會の權力が非常に強かつたのに反して民衆の力が弱かつたので、かゝる運動は教會や法王から直ちに彈壓せられてしまふ有様で、運動の効果に見るべきものがなかつた。

然しこの運動は右の如き壓迫に依りて消ゆることはなかつた。十五世紀後半から十六世紀初葉にかけてオランダ人文學者エラスムス *Desiderius Erasmus von Rotterdam* (1466—1536) は宗教改革に意を用ひ、教會の弊風や俗僧に對して痛烈なる攻撃をなすに至り社會に大衝動を與へた。彼は文藝復興の代表者でもあり又宗教改革の先驅者でもあつた。彼は十四歳の時兩親を失つてから寺院に入りて生活したこともあり、一四九六年より歐洲各地を巡りて大學に入り學問の研究に没頭したこともあり、一五〇九年英國王ヘンリー八世 *Henry VIII* (1509—1547) に招かれてケンブリッジ大學で數年間神學及びギリシヤ語の教授に従つた。而して聖書の研究には特に力を注ぎ遂にギリシヤ語の聖書を出版するに至つた。之が宗教改革に大なる影響を與へたのである。尤も彼は調和的性格の持主であつた爲めに實行方面に缺くる所があり、且つ彼はキリスト教の根本義や教會組織、教會政治等

について否定的態度を採つてゐなかつたから、自然説く所が改革の本源にふれなかつたのである。のみならず後年に至つては宗教改革運動が教會の統一を破るものであると考へ、遂に此の運動に反對をさへなす様になつたのである。

然るにルーテル Martin Luther (1483—1546) 出づるに及んで改革運動は躍進した。彼は一四八三年ザクセン州に炭坑夫の子として生れ、長ずるに及びて大學に學び、一五一二年には既にウイツテンベルヒ大學の神學教授の榮位についた。彼は鐵の如き意志を持ち深い信仰家であつたが、當時のキリスト教の俗化や、教會、法王の横暴を見て激怒し、遂に教會政治、教會の教義等に對する非難攻撃をなすに至り、教會の支配下に立つことを否定した。此の點はエラスムスと全然異つてゐる。而して彼は聖書のみを信奉する正純なるキリスト教義を闡明にし之に従ふべきものなることを力説した。特に一五一七年一〇月三一日に免罪符 Indulgence に對する「九十五箇條文」を公にして鋭い攻撃をなした。此の攻撃に對しては教會御用學者はこぞつて反對したが、又他面には彼に左袒する多數の同志を得て一大國民運動にまで進んだといふことは注目し得る。茲に彼の改革運動への發端が求められるのである。今免罪符につき一言せんに、ローマ教會の教義に依れば生前罪を犯した者が死ぬと、其の靈魂が地下で難行苦行をした後初めて昇天することが出来る。然し若し生前に教會へ淨財を寄進すれば法王から免罪符と稱するお札が授けられる。之を受けた者は難行苦行が軽減せられ容易に昇天することが出来るといふのである。今日吾人より見れば誠に馬鹿々々しきことではあるけれども、智識の淺い而も信仰に溺れてゐた中世紀

の獨逸の農民は之を信するものが多かつたので免罪符が盛に發行せられ、従つて之は教會の有力なる財源となつてゐたのである。ルーテルは此の弊を打破して愚民を救ひ、教會、法王を膺懲して眞の信仰に生きんが爲めに戰を始めたのである。

然るに其の後法王とルーテルとの間に協調がとれ、流石世人を驚かした大事件も平穩裡に解決するかに見へたが、たま／＼一五一九年にインゴルスタット大學神學教授エツク Johann Mayr von Eck (1486—1543) がライプツヒに於てルーテルと對論し、彼の所説を猛烈に反駁したのに刺戟を受け、彼の態度は俄然硬化し、以前よりも甚だしくローマ教會に向つて反駁攻撃を加へ、法王の權力を全然否定し、人は聖書中心の信仰に生きねばならぬと絶叫して宗教改革運動に蔘進するに至つたのである。而して彼は「ドイツ民族のキリスト教貴族に與ふる書」、「バビロニア捕囚に就て」、「キリスト教の自由に就て」の三著を公にして宗教改革の根本義を明にした。教會に於ては彼を破門し遂に異端者なりとの宣言をなした。彼は自分の身邊に危險の迫つてゐるを知り、一時ザクセン侯フリドリッヒの庇護のもとに隠れてゐたが、間もなくウツテンベルヒに歸り身命を擲つて改革運動に東奔西走した。その結果遂に彼の努力は酬ひられ新教が舊教同様に認めらるゝに至り茲に宗教改革の大業が成功したのである。此の成功は彼の深い信念、固い意志、不斷の努力の賜であることは勿論であるけれども、又當時の諸侯や都市の後援が與つて力ありしことを忘れてはならぬ。彼はかくして一五四六年にアイスレーベンに逝いたが新教派の祖たる榮譽は永遠に持續され、その信者からは無限の崇拜を受けつゝ、地下に同派の發展を庇護してゐ

る次第である。而して改革以來新教は歐洲北部諸國に廣まり抜くべからざる一大勢力を得るに至つた。

宗教改革經過の概要は以上の如くであるが、曩にも述べた様に此の改革は決して宗教のみの改革ではなくして人間の中世的生活から近代的生活への移行運動であり、解放運動であり、あらゆる部面に於ける改革運動であつたことを確認せねばならぬのである。

さて宗教改革の結果歐洲諸民族の間に「我」に對する自覺が強くなり、「束縛より解放」「平等權の獲得」となり、聖書の熱讀を通じて智識が開發された。之等は何れもギルド制度存在には悪影響を與へたのである。のみならず新舊兩教徒の戦ひの爲めに多くの都市が荒された。都市を根據としてゐたギルドは之が爲めに不利な立場に追込められねばならなかつた。又之迄同一ギルドに屬してゐたメンバーの中に新舊兩教徒が出来て來たから信仰上の相違の爲めに協力一致がとれなくなり、舊教の盛な地方では新教徒たるメンバーが、新教の勃興した地方では舊教徒たるメンバーがギルドを去らなければならなかつた。かくして信仰上からギルドの分解作用が行はれるに至つたのである。南歐の新教徒は一團となつて北歐に避難所を求めて移住することも少くなかつた。而して彼等は移動と同時に商工業をも持つて行つたのであつて、英國の如きはかゝる避難者から絹絲製造、ゴブラン綴織製造、帆の製造等の技術を輸入し得たのである。かくの如く、かつては同一ギルドにあつて協力してゐた者が今や他地方に移つて彼等の敵として活動することになつたのであるから、古いギルドが競争上對抗することが困難になつたことは想像にあまりある。

要するに文藝復興や宗教改革の結果人心に變化が起りギルドは従來の如く特權の維持、利用は自由平等の思想に反するを以て反對が多く、爲めに之より得てゐた經濟的、政治的利益が著しく減少すると共に、ギルドの分解作用なども起りて愈々其の勢力をそがれてしまつたのである。再言すればギルド制度は新時代に適合せぬ制度になつてしまつたので自然衰微の止むなきに至つたのである。

三、中央集權の擴大強化

古代に於ける國家は有力なる都市を中心とし、其の周圍を包含する都市國家であつて、今日の様な廣大なる版圖を有し之を統一して政治を行ふ權力を有する者はなかつた。中世紀に入りては各地に割據する封建諸侯がそれ／＼領地を有して政治を行つてゐた。勿論國家は存在してゐたけれども、封建領土の單なる集合に過ぎずして、之等諸侯を統一し全土を統治する君主權はなかつたのである。然るに近世に入りてより、以前に見られなかつた程の統一的國民的國家が建設せられ、國王の權力が擴大強化されその力が全土に及び、政治經濟など彼の意に従つて行はれる様になつたのである。かゝる政治的變化はギルド制度の上に直接強い影響を與へるに至つたのである。即ち王國は強化された中央集權に依つてギルドに對して甚だしく干渉をする様になつて來た。何故かと言へばギルドが特權を濫用し、排他主義を實行し、一般的に商工業の發展を阻害すること甚だしく爲めに幾多の弊害をさへ生ずるに至つたので、ギルドを壓迫して其の横暴なる活動を防止し、新時代に即する商工業を發展せしめ

る爲めに國民に營業の自由權を與へることが必要となつて來たからである。換言すれば國民的利益増進の爲めに干渉する必要が生じた譯である。しかし單にそれ丈の理由で干渉政策を實行したと限ることは出來ない。此の外に君主の政治的利益の爲めに又財政的利益の爲めにも之が爲されたと言はなければならぬ。次に之等の點に關して説明を加へることとする。

フランスではルイ十一世 Louis XI (1461—1483) がギルドの營業特權を抑壓して一般市民に營業の自由權を與へ、又親方免狀を國王から買受ければ親方試験を受けずして親方になれることが出來、親方となつた時に催さねばならなかつた披露宴を省くことが出來る様にした如きは其の一例である。ヘンリー二世 Henry II (11547—1559) は一五三三年に勅令を出して病院で働いてゐる少年達に手工業的技術を授ける手工業者には親方たるの資格を附與したるが如きものである。更にヘンリー四世 Henry IV (1589—1610) はギルドの規則を無視して工場を設け外國労働者を迎へて免稅其他の特權を與へ茲で働かした。コルベヤは更に其の主旨を汲んで國立工場 Royal factories を造り其の經費は國庫から支辨し、工場長は國王が任命することにした。Beauvais や Aubusson などの石鹼工場、海軍工廠の如きは此の種の工場であつた。又同じく國立工場と呼ばれてゐたが前記の工場とは異つた民營企業もあつた。之には租稅免除、補助金の下附、支配人に對しては貴族の稱號の附與等の特權を與へて保護したのである。Abbeville に於ける織布工場の如きは其の一例である。かゝる事實があつたに不拘ギルドが之等を防止し得なかつたのは中央集權の爲めに壓迫されてギルドの勢力が衰へたために外ならない。而して新

しく起つた商工業が發達するにつれてギルドの特權は侵害され、競争上の大敵となりて活動したのであるから此の點からもギルドの衰微は免れ難いことになつたのである。

次に國王自身の政治的利益の爲めには地方に於ける勢力を弱めることが必要である。そこで各國の君主は先づ都市を壓迫し出した。獨逸でも佛蘭西でも伊太利でも、同様の傾向が見られる。即ち獨逸では多數のハンザ都市が壓迫せられて極めて少數に減つてしまつた。佛蘭西ではルイ十四世 Louis XIV (1643—1715) 時代に殆んど都市の自由權は剝奪せられてしまひ、伊太利でも都市の勢力は全く地に落ちてしまつた。之等の都市には多數のギルドが活躍してゐたのであるけれども、都市と密接不離の關係にあつたので都市の衰亡は同時にギルドの衰亡を意味することになつたのである。又所によりてはギルドの役員に官吏を任命し、ギルドを國王の意の如くに左右したこともある。斯様にして都市への壓迫は同時にギルドへの壓迫となり、漸次特權を奪つてしまつたのである。最後に國王が財政上の利益を求めんとしてギルドに働きかけた事を述べて本稿を閉ぢたいと思ふ、フランス國王は或る時にはギルドの特權を確認し更に之を擴張せしめることに依つて國庫の増收を圖らんとした。即ちヘンリー三世 Henry III (1574—1589) はギルドの不正を淨化することに依つてギルド制度を強化せんとしたり、又ギルド制度を全國的に普及せんとしたるが如きは眞にギルド制度を發達せしめんとする意圖からではなく、寧ろ内心は其の反對であつたけれども、かくの如き意志を表はしてギルドから金錢を納めしめ、或は新しい加入者から加入金を國庫に納めしめんと企てたのである。又一六七三年の税制の改革もギルドが其の基金を政府に納付する

ことに依つてギルドの生命を保持し得る結果となつたのである。又非組合員に對してギルドの特權を侵害する様な特權を賣つて財政を豊かにせんとしたこともある。一四六一年から前述の親方免狀を賣りたるが如きは其の適例である。ギルドは之に對して反對したのは勿論であるが何等の効果も得られなかつた。しかし此の親方免狀も一五八一年の法律に依つて全部とりあげられてしまつた。更に又國王は直接ギルドの弱點を攻撃し或は壓迫せんとの氣配を見せて、若しギルドが之をのがれんとして金錢を支拂へば攻撃や壓迫の手をゆるめた。例へばルイ十四世が一六九一年にギルドの組合長其の他の役員全部を國王の任命する官吏を以て之にあてんとする意志あることを發表した。するとギルドは驚いて之を防がん爲めに、參拾萬磅を國王に納めたるが如き、それから三年たつて彼は又ギルドの會計を監督し検査する制度を創設せんとの計畫を發表し、若し其の實現を好まぬなれば四拾萬磅を出せと要求されたのである。其の後になつても之に類する要求が次から次へとなされてもギルドは之を拒絶することが出来ず遂には借金を生じ破産してしまふギルドも可成多かつたのである。

國民の利益の爲めに國王がギルドの實權を奪つたのは當然のことであるけれども、自己の權力を擴大強化せんが爲めに、王室の財政を豊かならしめんが爲めに、右の如き行爲をなしたといふことは決して賞すべきではない。しかし何れにしても王權の伸長、中央集權の擴大強化に依りてギルド制度が衰退せしめられたのは事實である。以上は主としてフランスの事情について述べたのであるが英國に於ても獨逸に於てもほど同様であつたと見て差支はない。英、獨に於ける此の點に關しては本誌第五卷第一號に記す所があつたから茲には之を省畧する。